

## 認知科学に現象学は何を寄与しうるか (ワークショップ 現象学と認知科学)

著者	柴田 正良
雑誌名	現象学年報
巻	18
ページ	87-97
発行年	2002-01-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/9915">http://hdl.handle.net/2297/9915</a>

# 認知科学に現象学は何を寄与しうるか

柴田 正良

## 一 現象学とは何をする哲学なのか？ 何が売りなのか？

ということとは、だれに聞いても多分、「絶対これだ」という自信たっぷりの答えが返ってきたきそうもないので、正面から問わないことにしよう。その代わりに、「事象そのものへ」とか、「本質直観」とか、「現象学的還元」とか、「客観的世界の手前にある生きられた世界に立ち帰る」といったスローガンを頭に思い浮かべながら、認知科学における一つの具体例に即して、現象学という思考方法(?)が心の科学に何を貢献しうるのかを少し考えてみたい。要するに、目指すところは現象学の可能的ケース・スタディであり、そのケースとは、コネクシヨニズムによる素朴心理学消去の主張である。

## 二 素朴心理学に対するコネクシヨニズムからの攻撃

素朴心理学(folk psychology)のいくつかの概念に対する攻撃は、主に消去主義的唯物論(eliminative materialism)の立場から行われてき

た。それは要するに、信念や欲求や意図といった概念は実は「まがいの概念」であって、それによる心的現象の説明は本当は根本的に間違った説明なのだから、将来、科学的心理学が成熟した暁にはそれらを本質的に含む素朴心理学は消去されるだろう、という主張である。素朴心理学は「心理学」という名を冠してはいても、その実体は、心理状態や行為に関して日常生活でふつうに用いられる説明方式であり、常識的な理解である。したがって、それが根本的に誤りであるとか、消去されるとかいうことになるのであれば、その影響は、例えばハイデガーの哲学が誤りだと判明して消去される(廃れる?)、といった場合とは比較にならないほど深刻で甚大である。

古くはセラーズ、ローティ、最近ではチャーチランド夫妻やステイツチが提起した消去主義の議論は、現在では認知科学における一つの研究パラダイムであるコネクシヨニズム(connectionism)が、より具体的な認知メカニズムの説明からの帰結という形で展開している。その消去主義の主張の眼目は、「われわれの認知のメカニズムが古典的計算主義の言うような構造ではなくコネクシヨニストの言うような構造をしているがゆえに、素朴心理学は認知科学からの裏書きを得られ

ない」というところにある。そこで以下でわれわれは、そのようなコネクシヨニズムの消去主義の主張の一つをきわめて分かりやすく構成し、それ以後のクラーク、スモーレンスキーらとの論争を引き起こしたラムジーらの議論を取り上げることしよう<sup>1)</sup>。

まず、かれらの主張（もしコネクシヨニズムの仮定が真なら、命題的態度 (propositional attitude) に関する消去主義も真だ）を、次のような構造の論証として再構成しておこう。この再構成には、「命題的態度は命題的モジュール性を必要条件とする」と「素朴心理学は命題的態度を必要条件とする」の二つ主張が暗黙の前提となっている。

前提 (1) 素朴心理学が正しければ、命題的モジュール性が成立する

(2) コネクシヨニズムが正しければ、命題的モジュール性は成立しない

結論 (3) それゆえ、コネクシヨニズムが正しければ、素朴心理学は正しくない (消去主義が帰結する)

ポイントは、素朴心理学がかれらの言う命題的モジュール性の主張を本質的に含意し、しかもコネクシヨニスト・モデルはその命題的モジュール性と両立しない、という点にある。かれらの主張が結論の条件法全体であり、条件法の前提だけ、あるいは後件だけではない、ということにも注意しておいて頂きたい。かれらの主張のポイントを理解するには、二つのこと、すなわち命題的モジュール性とは何かということと、コネクシヨニスト・モデルはなぜそれと両立しないと言われているのかということを理解する必要がある。そこで、それらにつ

いてのかれらの説明を順に見ておこう。

### 三 素朴心理学の本質？——命題的態度のモジュール性

素朴心理学は、人の心理状態や行為を説明するのに心的状態に訴えるわけだが、それを命題的態度によって個別化する。つまり素朴心理学の見方では、心というものは（純粹な感覚の生起を除き）、さまざまな命題的態度をユニットとして構成されているわけである。命題的態度とは、「ある事態  $P$  に対して認知主体がある態度をとっている」ということであり、例えば「宝くじが当たることを信じている」とか、「宝くじが当たったことを喜ぶ」とか、「宝くじが当たったことをおぼえていない」といったように、言語的には、事態を表す命題が志向的態度を表す動詞の目的語となって表現されるのがふつうである。命題的モジュール性とは、これらの命題的態度が「機能的に分離可能で、意味論的に解釈可能 functionally discrete and semantically interpretable」なだけでなく、なおかつ他の命題的態度や行為を生み出すという点で「因果的役割 a causal role を果たす」状態だ、ということの意味する。そのうち、まず「機能的に分離可能」とは、例えばある記憶「財布を昨日着たブレザーのポケットに入れておいた」を、他の記憶に一切関わりなしに、それ単独で獲得したり失ったりすることが可能だ、ということである。つまり、命題的態度はいわば原子論的な状態として、原理的にはそれ以外の命題的態度の存在なしにその機能を果たしうる。第二の「意味論的に解釈可能」というのは、命題的態度を事態に関わる一つの志向的状态と見なしうるということ、すなわち、ある信念  $a$  の個別化（つまり別の信念  $b$  との区別）を、 $a$  の関わる

事態がPなのかQなのかによって決めることができるということである。したがって、さらに例えば「彼は、昨日の金沢は雨だったと信じている」という信念や「彼女は彼と結婚したいと思っている」という欲求は、それぞれの命題部分が意味論的に評価可能であって、真や偽であったり、満たされたり満たされなかつたりする、と言うことができる。最後に、「因果的役割を果たす」というのは、ある信念が欲求と一緒にあって行為を引き起こしたり、ある信念と別の信念と一緒にあって第三の信念を引き起こすことができるということである。

そこで、これらの特徴がもっともよく現れるような事例を、お話として構成してみよう。

例えば、ジョンは叔父のマークを殺害するための二つの別々の十分な理由(信念と欲求のペア)を持っていた。一つは、マークが死ねば、親戚の少なからぬ資産が自分の手に渡ることをジョンは知っており、ジョンはその資産をいま欲しがっていた。また、マークは、ジョンの知り合いの女性、メアリーの出生の秘密を握って彼女を長年にわたって脅迫していた。ジョンは純粹にメアリーを救いたいと思っており、そのためにはずる賢いマークを殺す以外にないと信じていた。

さて、ジョンがマークを殺害したとき、彼はこの二組の理由のうちどちらの理由にしたがったのか、とわれわれは問うことができる。その答えによつては、ジョンの罪は重くも軽くもなるだろう。

( $\alpha$ ) 資産狙いか、あるいは( $\beta$ ) 恋人救出か、あるいは( $\gamma$ ) その両方か、われわれには分からなくとも、あるいはひよつとするとマーク自身にさえはつきりしなくとも、しかしいずれにせよこの問いにはきちんとした答えがある、とわれわれは考えているだろう。つまり、

どれがマーク殺害の本当の理由であつたか、ということには「事の真相」があると。

素朴心理学は、このように、同じ結果を引き起こすのに十分な二つの命題的態度(群)があるとき、そのうちの一方が因果的に活性化していながら、他方は因果的に不活性である場合を認めているように思われるが、これこそまさしく、命題的態度が「機能的に分離可能かつ、意味論的に解釈可能で、因果的役割を果たす」という特徴をもつていること、つまり命題的モジュール性をその本質としていることの証である。

#### 四 コネクションニスト・モデル——分散化され重ね合わされた表象

さて、並列分散処理(CDC)とも言われるコネクションニスト・モデルは、逐次処理型の古典的計算主義のモデルと競合しているが、その特徴を次の図1、2を見ながらごくごく簡単に説明しよう。細かい説明は省くが、まず、ユニットがいくつも結合して同時並行的に計算を進めていくコネクションニスト・ネットワークの一つ一つのユニットの動き(計算)は、図1のように行われる。図2は、それらのユニットが結合してもっとも典型的な三層型のネットワークを構成した場合の模式図であり、この結合は情報をフィードバックさせないフィードフォワード・タイプである。図2において、第一層は入力層、第二層は隠れ層、第三層は出力層となっている。

図1

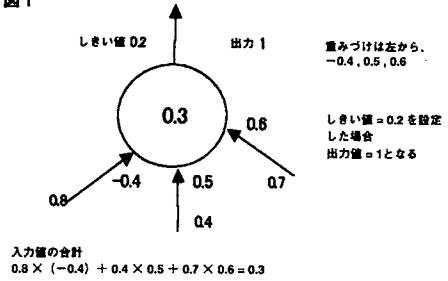
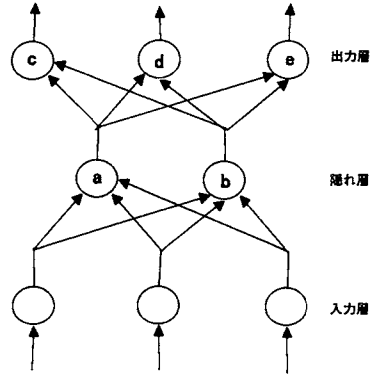


図2



柴田正良 [2001] p.145-7から

脳における計算方式から着想を得たコネクショニスト・モデルでは、情報処理は、一つの層の上に変形された活性化（興奮）パターンを次の層の活性化パターンに変形する操作だといえる。というのは、図1から分かるようにユニットは各入力値の合計によってその活性化の程度が決定されるから、たとえば図2にあるように、入力層からの刺激によって決定される隠れ層の2つのユニットの活性化の状態 a、b を一つの（2次元の）活性化パターンを形成するものと見なし、隠れ層からの刺激によって決定される出力層の3つのユニットの活性化状態 c、d、e もまた一つの（3次元の）活性化パターンを形成すると見なすなら、コネクショニスト・モデルにおける

る計算は、ある層の（ $n$ 次元の）活性化パターンを別の層の（ $m$ 次元の）活性化パターンに変形する作業（ベクトル変換）だと見なすことができるからである。この場合、各入力値には「重みづけ」というメトリハリが付けられている。すると、同じ入力値が来ても重みづけが変わればそのニューロンの活性化状態も変わるのだから、層から層への活性化パターンをどう変形するかを実質的に決めてるのは、各層の重みづけの全体が構成する「重みづけ配置」と各ユニットに設定される「しきい値」である。

そこで、ラムジーらが認知のモデルとして提出したコネクショニスト・モデルでは、その情報処理上の特徴はごく大ざっぱに言うと次のようになる。

(i) 「重みづけ」と「しきい値」として実現される情報のコード化、つまり表象は、どれかのユニットに局在的にあるのではなく、ネットワーク全体に広く分散している。

(ii) 個々の隠れユニットは適当な記号的解釈を持っていない。それはサブ・シンボリックである。

(iii) システムの知識をコード化したものと見なされる「重みづけ」は、通常のコンピュータのプログラムに相当する。注目すべきは、ネットワークは自分自身をプログラムするということがある。そのような学習は、入力／出力のペアをネットワークにくつも提示し、満足のいく入力／出力関係を確立するまでネットワークを訓練する、つまりすべての「重みづけの値」と「しきい値」を調節することによってなされるのが普通である（逆伝播法による訓練）。

による訓練）。

## 五 記憶に関するコネクションリスト・モデルの実際

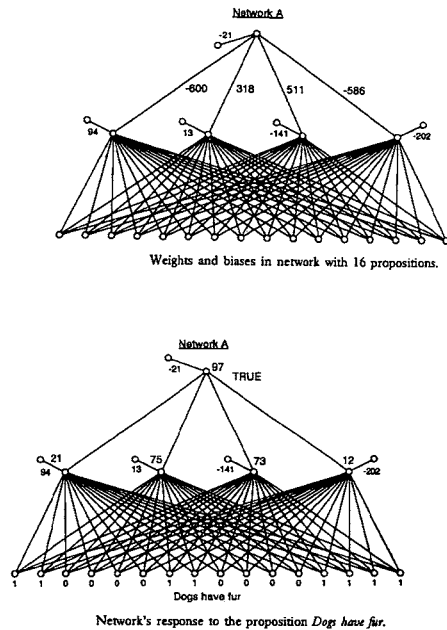
### 五― ネットワーク A

ラムジーらが訓練したこのネットワークは、一六個の命題の真偽を記憶しており、一六個の入力ユニットと四つの隠れユニットと、一個の出力ユニットを持つ(図3)。実際の入力には以下のようなカッコ内の値を入れ、出力は真を1、偽を0と定める。

- (1) 犬には毛がある 11000011 00001111) ----- 出力: 真1
- (2) 犬には爪がある 11000011 00110011) ----- 出力: 真1
- ...
- (5) 猫には毛がある 11001100 00001111) ----- 出力: 真1
- ...
- (15) 犬にはヒレがある 11000011 00001100) ----- 出力: 偽0
- (16) 猫にはヒレがある 11001100 00001100) ----- 出力: 偽0

先ほど述べた逆伝播法(バックプロパゲーション)による訓練は、それぞれの真なる命題に対して出力が0.9以上、偽なる命題に対して0.1以下となった時点で終了する。したがって、訓練の結果ネットワークが獲得した一組の重みづけ配置とときい値だけで、これら一六個の命題すべての真偽の識別が行われる。つまり、1~16の命題のどれかがネットワークAに提示されると、その真偽が正しく判定(計算)されるという意味で、Aはこれら一六個の命題の真偽に関する情報を蓄え

図 3



Ramsey, Stich & Garon[1990], p. 326-7.

ている、と言ってよい。

古典的な局所的ネットワークでは、それぞれの命題に対応する部分が機能的に別々のものとしてネットワークに存在するから、ある特定の命題の表象が因果的役割を果たしているのかどうか、を問うことは意味がある。それに対しこの種のコネクションリスト・ネットワークでは、ここで見たように、特定の命題を表象するために用いられる特定の部分ないし状態というものは存在しない。ネットワークAにコード化されている情報は、ネットワーク全体にわたって全体論的に、また分散化されて蓄えられている。つまり、ある命題の表象には多くのユニットや重みづけが関与し、逆に一つのユニットや重みづけは、多くの異なる命題のコード化に関与している。したがって、ある特定の命題の表象が因果的役割を果たしているのかどうか、と問うことに

は意味がない。つまり、コネクシヨニスト・モデルと命題的モジュール性は両立しない。

### 五二 ネットワークBとの対比——ダメ押しの例

図3と同じユニット結合をしたもう一つのネットワークBの新たな訓練を想像してもらいたい。Bは、Aのすべての命題に加えてもう一つの命題(17:魚は卵を産む 11110000 11001000 出力:真1)を学習する(図は省略)。ラムジーらの訓練の結果では、A、B二つのネットワークの(重みづけ)と(ほしい値)は、まったく共通するところが無いほどに異なっている。したがって当然、Bに追加された命題を表象する部分がBのどの部分に存在しているのかを言うことはできない。つまり、Bのどの部分を取り除けばAのネットワークになるのかを言うことができない。なぜならBのすべてのユニットが、17番目の命題「魚は卵を産む」に関与しているからだ。ということは、AとBの違いは、素朴心理学が指定するような(機能的に分離可能で意味論的に解釈可能な状態)相互の違いとは本質的に異なる、ということである。

さらにこのことによって、例えば「 $HP$ を信ずる」多くの人はその内部状態において重要な性質を共有しているだろう、という素朴心理学的な常識もくつがえされる。というのも、ネットワークAもBも「犬には毛がある」ということを信じており、更に無数のネットワークもそうでありうるが、これらは、コネクシヨニストの言語で記述可能であるような性質(内部的特徴)を何一つ共有していないからである。これらのネットワークは、本物の種(a genuine kind)を形成しているのではなく、混沌とした選言的集まりをなしているにすぎない。

かくして、マークの殺害犯ジョンの動機は、(a) 資産狙いか、あるいは(β) 恋人救出か、あるいは(γ) その両方、のいずれなのかという問いは、原理的に答えようがない無意味な問いである。ここには、われわれは知らないが神ならば知っている、といったような(事の真相)はそもそも最初から存在しない。

### 六 現象学者はどのようにこの種の消去主義に反撃しうるか?

さて、ラムジーらの議論の評価をすることがここで目的ではない。目的は、もし現象学の立場からこの種の消去主義に対抗しようとしたら、どのような議論の仕方がありうるか、ということの検討である。もつとも、ここでケース・スタディとしては、逆にいかに消去主義を擁護するか、という路線でもまったくかまわない。しかし、ここで反消去主義の方を取り上げるのは、恐らく九〇%以上の現象学者は、素朴心理学が今後の科学的探求の結果誤りだとして破棄されるだろう、という主張には断固反対すると思われるからである(きちんとアンケートを採ったわけではないが、私はこの数字にいくらかなら賭けてもよい)。結論を初めから決めて論証を組み立てるのはいささか学問的良心に悖る(?)ように思われるかもしれないが、すべての方策が失敗したらいさぎよく消去主義の軍門に下ると覚悟しているなら、それはそれで健全なやり方であろう。そこで、前提二つと結論からなる先ほどのラムジーらの論証に戻ろう。その牙を抜いて素朴心理学を擁護する戦略はいくつか考えられるが、まずは次の四つだろう。

(a) 前提の(1)を拒絶し、素朴心理学の正しさと命題的モジュール性が成立しないことは両立する、と論ずる。つまり、命題的モジュール性の成立は素朴心理学の正しさの必要条件ではない、という論証を展開する。

(b) 前提の(2)を拒絶し、コネクショニズムの正しさと命題的モジュール性が成立することは両立すると主張する。つまり、コネクショニズムの正しさは命題的モジュール性が成立しないことの十分条件ではない、ということを示す。

(c) これらの論証は受け入れるが、結論の前件である「コネクショニズムは正しい」を拒絶する。つまり、コネクショニズムは正しくないことを示すことができれば、結論は「前件が偽であるがゆえにトリヴィアルに真な条件法」という形で牙を抜かれ、素朴心理学は正しくないという単独の結論は導けない。

(d) これらの論証は受け入れるが、前提(1)の条件法の前件、「素朴心理学は正しい」ということを拒絶する。これは、一見すると無謀かもしれないが、〈理論としての素朴心理学〉というかれらの議論の大前提を拒絶し、むしろ〈道具としての素朴心理学〉を擁護しようといういわば捨て身の戦略である。この場合、命題的モジュール性が成立すると見るかどうか、コネクショニズムが正しいと見るかどうかは、論者により異なる。

それ以外にも例えば、次のような戦略もありうるだろう。

(e) これらの論証の隠された前提のどれか一つを掘り崩すことによ

って、論証の妥当性から毒をぬき、無害化する。

さて、問題は、いずれの選択肢をとろうとも、その論証において〈わりわけて現象学的〉と言えるような要素があるだろうか？ ということである。例えば、直観や論証の評価において、また、論証の組み立て方や証拠への接近方法において、〈現象学にのみ可能なやり方〉というのはあるのだろうか？ 私の結論を先取りしていえば、そのような〈特権的に現象学的なもの〉は、認知科学のこのような問題に関しては存在しない。つまり、ふつうの哲学的な概念分析や科学論の議論以外に、そのような、とくに現象学を標榜するような有効な道具立てはないように思われるのである(あちこちから不満の声が聞こえてきそうだが・・・)。

例えば、現象学者であるあなたが(a)の路線をとったとしよう。するとあなたがなさねばならないことは、正しいと思われる素朴心理学的な概念の使用や説明の中に実は命題的モジュール性は見当たらない、ということの論証である。しかし、素朴心理学的な概念や説明とは要するにわれわれの日常慣れ親しんだ概念の枠組みなのだから、問題の論証のための素材はもつとも身近なところにある。すると、必要なことは、日常的な心的概念の枠組みの真相を見抜き、身近すぎるがゆえの見逃しや先入観を排して、正しい概念分析を達成することだろう。このような作業は、当人によってうまいへたはあろうが普通のいわゆる(哲学的な)概念分析であって、とくに現象学的な何かを必要とするわけではない。この事情は、(d)の路線をとり、「素朴心理学は実は理論ではなく生活のための道具なのだ」ということを論証しようとする場合もほぼ同じである。



では、(b)や(c)の路線をとった場合はどうか。「コネクションニズムは命題的モジュール性と両立可能か否か」、またそもそも「コネクションニズムは認知理論として正しいのか否か」ということを論証するのは、現象学者ができるならやってもいいが、できるとしてもそれは認知科学者としてであろう。つまりこの場合、必要なのは、認知のメカニズムに関する経験的探求の一環としてのコネクションニズム研究である。つまり、認知の理論としてはどれが正しいのか、またその理論から何が帰結するのかということの探求は、まさしく認知科学のなすべき作業にほかならないのである。

さて、(e)はとりあえずおくとしても、それでは結局、現象学固有の道具立てが独自性を発揮するような領域は残されていないのだろうか。一つだけあるように思われる。それは、心的諸概念の分析ではなく、心的現象そのものの直観的把握、つまり意識現象それ自体の現象学的反省(?)といったものであろう。しかし、そのような〈現象学的直観?〉が正確にはどのようなものであれ、それが「意識に現象する生のデータの純粋な把握と記述」といったものを含む限りでは、実は、それこそこの領域において探求者を迷わすもつとも危険な道具となりかねない。というのも、離断脳や脳損傷の多くの事例が示すように、脳は、われわれの意識に、信頼しうるデータをさほど多くは渡してくれていないようだからである。右脳、左脳、視覚系、触覚系といったさまざまな認知のモジュールが相互にゆるやかに独立であった、それゆえある場合には一つのモジュールが勝手な合理化を独断的に行ってしまうような領域では、意識にのぼってくるデータは必ずしも真実の姿を伝えていない。そのような領域の現象に関しては、直観的に意識可能なデータも信頼おけないし、そのデータの「合理的解釈」

のために無意識のメカニズムに訴えかけることも、都合のよい作り話になりかねない。したがって、直観的なデータが必ずしも説明のため最後の拠り所ではなく、むしろ他のものによって説明すべき、あるいは説明しざる(explain away)べきものでもあるからには、直観は、常に誤りだというわけではないにしても、誤りを誘発しないように警戒しなければならぬ道具にすぎないのである。

というわけで、コネクションニズムからの攻撃に対する素朴心理学擁護というケースに関しては、へとりわけて現象学的なもの<sup>(1)</sup>の出番はないように思われる。それは偶然ではなからう。というのも、認知科学の探究領域が、われわれの意識的な心的現象の背後にあつてそれを支える認知メカニズムの研究である限り、そこでは現象への直観的な接近は特権性を剥奪されざるをえず、したがって問題となる現象へ有効な仕方で関与するには、ますますもって、哲学一般として関与するか、科学として関与するかのいずれかしか道は残されていないからである。するとこの教訓は、もつと一般化できるのではないか?

## 七 〈哲学〉する? 〈科学〉する? それとも〈お話し〉する?

「コネクションニズムVS素朴心理学」というのは、認知科学においてあまりにローカルなケース・スタディであつて、以上の議論の射程もそのローカルな領域にとどまる、と期待(?)する向きもあるかもしれないが、残念ながらそうではない。素朴心理学の運命というこの問題は、おびただしい数の関連文献からも分かるように、現在の認知科学や心の哲学のもつとも重要な話題の一つなのである。そこで、「現

象学だつて哲学じゃん、じゃ、哲学は認知科学に何を寄与しうるのか？」ということの示唆を最後に簡単に紹介しながら、現象学の「可能な最終的な寄与形態」をあぶり出しておこう。もちろんそれは、フッサールやハイデガーやメルロ・ポンティらの「文献解釈」などという、私を含めた老人世代向けの「窓際族のお仕事」でないの言うまでもない。

さて、その示唆とは、以下に少々アレンジして紹介する、ファン・ゲルダの哲学の宣伝（／＼哲学者への提言？）である。これは、認知科学において哲学が果たす役割を論じたものであるが、認知科学を科学一般に、また哲学をさまざまな流派の「・・・哲学」に置きかえて読むこともできる。

#### 七一 哲学者の用いる方法・道具立て

七一 論証(Argument)……ラムジールのような消去主義の論証を組み立てること、また、それを反駁するための論証を企てること。

七二 概念分析(Conceptual Clarification/Analysis)……論証に用いられている言葉の意味、概念を明晰化すること。例えば、命題的モジュール性の特徴の一つ、「機能的に分離可能」とはどういうことかを明確にすること。

七三 歴史的視点(Historical Perspective)……ハイデガーやワイトゲンシュタインといった過去の哲学者の論証やアイデアに立ち返ることによって、目下の問題に対する解決のヒントを得ること。もちろんそれは、かれらへの興味がつばらの目的で文献解釈に「はまる」ことではない。

#### 七二 哲学者が果たす役割

七二 開拓者(The Pioneer)……これまで誰も考えつかなかつたような問題を立てる人。例えば、われわれの思考や推論は「思考の言語 Language of Thought」によってなされているのではないかという予測とその論証をなし（フォード）、さらにその予測を科学者の手による探求に渡す。

七三 住宅建築調査士(The Building Inspector)……経験的探求の土台となる理論的前提や方法論的前提を明確にし、それらの欠陥を調査し、必要とあらば改善する人。

七四 禅僧(The Zen Monk)……他の誰も歯が立たず、また、それに取り組むだけの時間も忍耐も持ち合わせていないような困難な理論的問題に取り組む人。

七五 地図制作者(The Cartographer)……認知科学のさまざまな要素の全体がどのように関連しあっているかを示す人。この科学の広域的な概念上の地図を作製する。

七六 古文書保管人(The Archivist)……過去の重要なリサーチ・プログラムやアイデアの成功例／失敗例を理解し、いつでも使えるように保管しておく人。

七七 チアリーダー(The Cheerleader)……新たな見込みあるリサーチ・プログラムが認知科学や社会一般で認められるように、お墨付きと声援を送る人。

七八 アブ(The Gully)……ソクラテスのような人（とまでファン・ゲルダは言っていないが）。あるいはコネクシヨニズムを攻撃するフォードとピリシン、その毒々しさと挑発的態度と執拗さの点で。

私としてはこれにもう一つ、哲学に目覚めた科学者をいたずらに観念の袋小路に迷いこませない、という哲学者の役割をつけ加えたい。

七二八 オカルト療法士？(The Exorcist)……新たなリサーチ・プログラムが発見や成功に酔い、それを特定の哲学の正しさの証だと勘違いするような科学者を、正気に戻す人。

さて、ファン・ゲルダのこの話をさらに詳しく解説する必要はないだろう。これらのリストは、完全であることを意図されていないし、完全でなくともいいが、それらがおおむね妥当だということはわれわれも実感することができると思う。もし現象学者が認知科学に何か寄与をなしうるとしたら、彼女／彼は哲学者としてここに挙げたようなことのいずれかをなすか、あるいは認知科学の何らかのスペシャリストとして科学をするかのどちらかであって、ことさらに現象学者として何かをするわけではないだろう。

しかし、それですべてだろうか？ 私の予想では、良くも悪しくも、もう一つの寄与の形態、つまり現象学の〈最終的な貢献の仕方〉というものが実際に残っているように思われる。そして、現象学にとつての問題は、「哲学でも科学でもない」という自覚なしにそれが漠然と目指されている、という傾向にあると思われる。では、それは何か。一言でいって、それは、科学者にインスピレーションや刺激を与えろという点でのみ評価される、芸能(芸術?)としての〈お話〉である。しかもそれは現在のところ、小説や戯曲のような奔放さに欠けた、妙に禁欲的な、現象学ジャーゴンでもつばら綴られる、難解さを売り物にした〈哲学物語〉である。その具体的なテーマは、例えば「超越論

的なものの非主観化」だったり、「世界へ投錨される身体性」だったり、「根元的差異化の裂開」だったりする。それは、哲学以外の人々に音楽や絵画のような情動的影響を与える以外は、仲間内の別の言葉による換金にしか役立たない一種の〈言葉遊び〉である。私は、このような形態での現象学の貢献が必ずしもまったく悪いとは思わない。しかしそれは、上で述べたような意味での哲学でも科学でもないのだから、芸能の運命が一般にそうであるように、人々の心をつかむ〈面白さ〉が絶対の条件である。現象学のレトリックやジャーゴンに知的に反応してくる貴重な人種を〈飽きさせない〉だけの斬新で、野心的で、肌理の細かい〈お話〉でなければ人々からいざ見放されてしまうだろう。いつまでも過去の偉大な現象学者の遺産で食いつないでいるようでは、〈芸〉もやせ細るといふものだ。また、もつと重要なことに、良心的な〈お話〉作者なら、自分のなしていることがいわゆる〈真理〉の探求ではなく、〈話芸〉の追求であることにも自覚的であるべきだろう。私は、このような〈最後の貢献〉を現象学が「すべきだ」とも思わないが、やるなら哲学や科学の看板をいさぎよくかなぐり捨てて、できるだけ破天荒に、できるだけ面白くなるように〈ぶっ飛んで〉もらいたいと思う。

さてもちろん、これはあまりに事態を単純化している、という批判はあえて引き受けよう。しかし、あるときは銀行員、あるときは父親、また別のあるときには格闘技愛好家という三つの役割を同じ一人の人物が演ずることはできても、その三つの〈平均〉であるような役割と違うのではないのだから、現象学者に対してもその都度こう問うことは大事だと思う。今あなたは、

「哲学」しますか、「科学」しますか、それとも「お話」しますか?」<sup>(5)</sup>

## 注

- (1) W. Ramsey, S. Stich, & J. Garon, "Connectionism, Eliminativism and the Future of Folk Psychology", in C. MacDonald & G. Macdonald(eds.), *Connectionism*, Basil Blackwell, 1995, pp. 311-338. なお、これに対する以下の一連の反論、応答が同じ著作の中に収められている。A. Clark, "Connectionist Mind", P. Smolensky, "On the Projectable Predicates of Connectionist Psychology: A Case for Belief", and S. Stich & T. Warfield, "Reply to Clark and Smolensky: Do Connectionist Minds have Beliefs?" なお、それ以外にもラムジラーの論文に対してベクトルらが論じている。W. Bechel & A. Abrahamson, "Connectionism and the Future of Folk Psychology", in S. Christensen & D. Turner(eds.), *Folk Psychology and the Philosophy of Mind*, Lawrence Erlbaum Associate, 1993.

(2) もう少し詳しい説明は、例えば、柴田正良『ロボットの心……7つの哲学物語』、講談社現代新書、2001、第五章を参照。

(3) ラムジラーの議論に関するもう少し詳しい説明と、「その消去主義におまえばどう応えるのか」ということに関しては、柴田正良「素朴心理学が静かに消える日」、服部・美濃・戸田山・柴田編『心の科学と哲学……コネクショニズムの可能性』所収、晃洋書房（近刊予定）を参照。

(4) 例えば、下條信輔『サブリミナル・マインド』、中公新書、1999、ラムチャンドラン&ブレイクスリー『脳の中の幽霊』、角川書店、

1999などを参照。

(5) Van Gelder, "The Roles of Philosophy in Cognitive Science", *Philosophical Psychology*, Vol. 11, No.2, 1998, pp. 117-136. 私はこの論文の存在を、工学倫理公開シンポジウム「工学倫理と企業倫理」（二〇〇一年一月、名古屋工業大学主催）における名古屋大学・戸田山和久氏の発表から知った。その後の求めに応じて論文を快く送付して頂いた戸田山氏に、この場を借りて感謝の意を表したい。

(6) 最後に、このワークショップの後でわが国で出版された『ハイデガーと認知科学』（門脇・信原編、産業図書、2002）について一言述べておきたい。「そんなこと言ったって、認知科学者自身がハイデガーの哲学から学んでるじゃん」という若い人たちの声もあるだろうから。しかし、この書物の議論が示しているのは、表象の役割や日常的知識の本性に関して、これまで認知科学者やその周辺の哲学者たちはひよっとするとハイデガーほどにも賢くはなかった、ということであって、ハイデガーほど現象学者ではなかったということではない。

（柴田正良・しばた まさよし・金沢大学）